論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　楊　慶慶

論　文　題　目

近世における隠元· 黄檗宗と日中文化交流
―人· 物· 葬送儀礼を中心に―

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	近本　謙介
委員	名古屋大学教授	佐々木　重洋
委員	名古屋大学教授	塩村　耕
委員	名古屋大学准教授	東　賢太朗
委員	龍谷大学教授	阿部　泰郎

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の概要】

本論文は、承応三年（1654）に渡日し、寛文元年（1661）黄檗山萬福寺を建立して、日本黄檗宗の開祖となった隠元隆琦（1592～1673）の事績を、黄檗宗開立をめぐる日本の禅僧との交流、後水尾法皇との関係、葬送儀礼における黄檗宗と臨済宗・曹洞宗および中国の黄檗宗との比較から多角的に分析することで、隠元と黄檗教団が日本宗教に与えた影響と意義を解明しようとするものである。本論文は、序章・終章と三部に各二章ずつを配して構成され、末尾には、後水尾法皇の信仰に関する資料年表が付される。

序章では、研究の背景と目的が述べられ、隠元と黄檗宗をめぐる近年の研究動向と成果に加えて課題が整理される。従来の研究では歴史的な研究が主であったが、本論文は日中双方の第一次資料に基づき、より広い視点から思想や仏教儀礼の面を加えた交流の実態とその意義を解明する方法論に立つことが述べられる。

第一部「隠元・黄檗宗と日本禅界―「人」の交流を中心に―」の第一章では、隠元が黄檗宗開立に至る背景を、幕府の宗教政策および日本仏教界の状況に着目し、隠元の妙心寺招請をめぐる親檗派と反檗派の論争内容と、親檗派の龍渓性潜の尽力により幕府から認められる過程を明らかにする。第二章では、萬福寺開創における龍渓の多大な功績を確認した上で、その動機を臨済宗再興への期待や、隠元の著述を通じた深い共感と求道心といった、外在的・内面的要因から定位する。

第二部「隠元・黄檗宗と日本皇室―「物」の交流を中心に―」の第三章では、後水尾法皇の詠歌、隠元の法皇への書簡や詩偈の分析を通じて、自由闊達・縦横無碍な境地や教化のあり方をめぐる思想・感情における緊密な両者の内面的結びつきを、法皇が隠元に深く帰依し外護した要因と結論する。第四章では、従来ほとんど触れられていない隠元の故郷福建省由来の三平瑞木像を取り上げ、隠元がこの像を臨済宗の正統な法脈意識に基づき法皇に献上した意図や、法皇が仏教の復興事業の象徴的な像として、皇室ゆかりの泉涌寺に安置した経緯を明らかにして、法皇と隠元の関わりを新たな視座から定義づけている。

第三部「黄檗宗と臨済宗・曹洞宗との相互影響―葬送儀礼の視点から―」の第五章では、黄檗宗の思想、儀礼などを理解するため、『黄檗清規』・『黄檗山内（小）清規』の葬送儀礼を取り上げ、これらが中国の『勅修百丈清規』・『禅苑清規』を受容しつつも、独自の特徴を有していることを明らかにする。第六章では、近代成立の『津送須知』における住持の葬儀の特徴を分析し、先行する『黄檗清規』や『黄檗山内（小）清規』の伝統的な儀式を継承する一方で、臨済宗や曹洞宗からの影響を受けた混態としての実態を明らかにして、葬送儀礼の変遷を確認する。

終章は全体の総括であり、人・物・儀礼の視点から各章で明らかにした成果を再確認した上で、今後の課題を三点にまとめて述べている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の評価】

本論文は、隠元と黄檗宗をめぐる問題について、人・物・儀礼という三つの視点から分析する方法論が、新たな研究の視界を開くことに成功している点が高く評価される。本論文により、当該の研究課題を考える上で踏まえるべき重要な視座が提起され、日中双方の資料や事象に基づく検証が必須であることが明らかとなった。

第一部第一章で、隠元渡日前後の日本における禅宗の状況について、臨済宗妙心寺における隠元招請をめぐる対立の構図と内実を、親檗派の龍渓等、反檗派の愚堂等の動向から確認し、黄檗禅が龍渓の尽力により幕府に認められた経緯を踏まえた上で、第二章で龍渓の臨済宗の正統性への意識や隠元への崇敬の念の本質を考察することは、政治と宗教をめぐる環境と禅僧の信仰の内面を併せ考える方法論として成功している。中国の禅林や禅匠に憧れていた龍渓が、隠元の渡日前にその語録を読む機会を得ていた点の指摘も、龍渓の皇室や幕府への働きかけについて、時系列で黄檗宗開立を考証する上で重要かつ有益な視座となる。

第二部第三章における後水尾法皇の詠歌への着目は、法皇の仏教への帰依や解脱の境地への思いがどのように表現されたかを知る上で重要な考察であり、さらに隠元の法皇への書簡や詩偈の分析を通じて、隠元に対する法皇の尊崇の念がいかに醸成されたかを明らかにする点は、両者の双方向の信頼関係が黄檗宗開立に結びついたことを、多様な資料から証する成果に結実している。この点を踏まえて、第四章で取り上げる福建省由来の三平瑞木像をめぐる考察は、本論文の白眉と言える。隠元が念持仏とし、日本での弘教守護と祝福を期した本像を、示寂に先立ち、法脈を継ぐ法皇へ献上した点の指摘は大きな意義を有する。そこに、中国における臨済宗の正統な法脈意識と、それを受け止めた法皇が、皇室の菩提寺でもある泉涌寺に、仏教復興のため本像を安置するといった、日中の禅宗史と仏教史をめぐる深い連繋を窺うことができる。

第三部第五章で、『黄檗清規』・『黄檗山内（小）清規』を中心に、黄檗宗の住持、亡僧、東堂の葬送儀礼の特徴を明らかにし、中国の『勅修百丈清規』・『禅苑清規』の受容や影響と、独自の特徴の双方を指摘する点は、従来の研究を大きく進展させるものである。さらに、黄檗宗の葬送儀礼に明末仏教の思潮からの影響が見られることを資料に基づき明らかにした上で、隠元の黄檗禅における坐禅重視の特徴を指摘することで、その多様性を葬送儀礼から解明する方法論も、有益な成果につながっている。第六章で『津送須知』を分析対象に加えることで、近世から近代に至る禅宗の葬送儀礼の変遷を明らかにした点も、今後の研究の展開に資する成果として評価できる。

本論文に瑕疵が無い訳ではない。和歌や詩偈の読解はさらに深められるべきであり、葬送儀礼の分析もより綿密であることが期待される。しかしながらこうした課題も、今後の研鑽によって克服されていくものと思われる。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。